

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653038

研究課題名(和文) 欧州安保協力機構と欧州審議会の再編成・拡大プロセスをめぐる萌芽的研究

研究課題名(英文) Restructuring and Enlargement of the Council of Europe (CoE) and Organisation of Security and Co-operation in Europe (OSCE)

研究代表者

東野 篤子 (HIGASHINO, Atsuko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60405488

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、冷戦後における欧州安全保障協力機構および欧州審議会の再編成と、欧州審議会の拡大プロセスに関し、理論的・実証的検討を実施した。理論的にはコンストラクティヴィズムおよび言説分析の枠組みを用い、冷戦後のヨーロッパ秩序の再編成に関わる規範・認識・言説がどのようなものであったのかを、EUやNATOで用いられたロジックも参照しつつ、論文にまとめた。実証的には、トルコおよび旧ユーゴ諸国の冷戦後ヨーロッパ秩序への統合の問題や、ウクライナ危機等の現在進行形の諸問題にも言及しつつ、ヨーロッパの複数の機構が重層的に関与しながらヨーロッパの秩序再編成に取り組んだ(取り組もうとした)過程について考察した。

研究成果の概要(英文)：With this grant, I was able to conduct theoretical and empirical research concerning the restructuring and expanding process of the CoE and OSCE after the end of the Cold War. Drawing on a insight from the constructivist approach of IR, I tried to identify European leaders' norms and discourses, and explored how such norms and discourses functioned in order to rationalise and justify the various political decisions to reform and enlarge the CoE and OSCE. Since I have already conducted a series of researches on norms and discourses of the EU and NATO enlargement prior to this KAKEN research, I could include my previous research findings to this research, and compared/contrasted similarities and differences of the norms and discourse of the various European institutions after the end of the Cold War.

研究分野：国際関係論

キーワード：欧州審議会 欧州安全保障協力機構 欧州連合 北大西洋条約機構 規範 言説 拡大

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は過去 20 年ほど、冷戦終焉後の EU と NATO の拡大について考察してきた。主に EU と NATO それぞれの拡大ラウンドの諸段階におけるヨーロッパ国際政治上の背景、各機構内部での対立と協調の構図、拡大の賛否をめぐる政治ディスコース、拡大における重要な決定がもたらされた要因などについて、詳細な部分まで明らかにすることができた。しかし、個別の機構における意思決定過程を詳細に追うという手法をとったことにより、各拡大プロセスが総合的にヨーロッパ国際政治全体に対してもたらすダイナミックな影響については十分な考察が出来なかった。このため、冷戦終結後現在までのヨーロッパにおける秩序再編成を検討するにあたり、これまでの自らの「機構別」アプローチを脱し、ヨーロッパ国際秩序再編成の大きな流れの中での各機構の拡大の意義づけや、拡大のロジックの機構間の「伝播」の度合いを、EU、NATO 以外の重要な機構も交えて総合的に再検討する必要性を痛感するようになった。

欧州安全保障協力機構 (OSCE) および欧州審議会 (CoE) は、ヨーロッパ国際政治における重要性は広く認識されてきたものの、その研究は国内外ともに質・量ともに非常に限られている。また、先行研究は両機構を個別に検討するものが多く、その相互連関 (および EU や NATO など、現代のヨーロッパ国際政治において支配的な影響力を有する 2 機構への影響) などについてはほとんど研究されてこなかった。

上記の状況に対して、究極的には、冷戦後のヨーロッパ国際政治秩序の再編成をめぐる問題を、複数の地域的国際機構の拡大という視点から総合的に分析し、そこに内在する規範とディスコースを抽出することが必要となる。このため、本研究課題ではその準備段階として、冷戦後比較的早い段階で実施された CSCE (のちの OSCE) の再編と CoE の拡大に着目し、当時展開された拡大をめぐる様々な規範的議論を抽出することを試みる。各機構は当然のことながら異なる目的と機能を有しているが、冷戦後の新たな課題に直面した際、各機構内部の議論は興味深い重なりを有し、そこで用いられた規範的ディスコースがその後の EU・NATO の拡大においても繰り返し用いられる側面があった。

2. 研究の目的

冷戦後のヨーロッパ国際政治秩序の再編成をめぐる問題を総合的に検討するために必須の準備作業として、OSCE (1994 年に欧州安全保障協力会議 (CSCE) から改変) の再編作業 (旧ソ連および旧ユーゴの後継諸国の受け入れ) および CoE の拡大という視点から分析することを目的とした。その際、拡大をめ

ぐる政治、経済、安全保障、社会規範の形成・発展過程を中心的な分析対象とする。具体的には、各機構の拡大プロセスにおける既加盟諸国による「ヨーロッパ性」の再定義、拡大の正統性と一定の規範との (ディスコース上の) 連関、それら規範とディスコースの他機構における再生産と更なる秩序再編成の影響を分析することにより、地域協力・統合のダイナミズムの重要側面を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では 1989 年 (フィンランドが CoE に加盟) から 2007 年 (モンテネグロが CoE に加盟) までの期間について、OSCE と CoE の再編成と拡大をめぐる議論の重なりと乖離、主な規範的ディスコース、重要決定が行われた契機とプロセスなどについて集中的に分析した。第一に、CoE および CSCE/OSCE の再編成および拡大プロセスを時系列的に追いつつ、両機構における再編成および拡大をめぐる機構内部での議論を比較検討し、その議論の重なりと乖離を明らかにした。そのうえで第二に、冷戦後のヨーロッパ諸機構の一連の再編成と拡大に際し、各機構がどのような政治、経済、社会、安全保障上の規範 (あるいは規範的ロジック) を打ち出し、それがいかに (どの程度) 他の機構の拡大へと伝播したのかを明らかにした。すなわち、冷戦後の国際秩序再編成において、各機構の既加盟諸国が「ヨーロッパの機構」(あるいは「ヨーロッパ性」そのもの) をいかに (必要に駆られて慌ただしく) 再定義したのか、そこで提示された規範とディスコースがいかに再生産され、秩序再編成の次段階への影響を与えていったのかを明らかにする。本研究課題の成果を受け、最終的には、ヨーロッパの主要な 4 機構 (OSCE・CoE・EU・NATO) の相互連関とダイナミズムについて総合的に検証する機会も得た。

あくまで各機構内部でのディスコースと規範に特化した研究を行うため、加盟候補諸国内の加盟準備状況等については本研究課題では直接的には扱わなかった。理論的枠組み・アプローチとしては、国際関係論の社会構成主義 (ソーシャル・コンストラクティヴィズム) を中心とし、言説分析などの手法を取り入れて分析した。

4. 研究成果

冷戦後における OSCE および CoE の再編成と、CoE の拡大プロセスに関し、理論的・実証的検討を実施した。理論的にはコンストラクティヴィズムおよび言説分析の枠組みを用い、冷戦後のヨーロッパ秩序の再編成に関わる規範・認識・言説がどのようなものであったのかを、EU や NATO で用いられたロジックも参照しつつ、論文にまとめた。実証的に

は、トルコおよび旧ユーゴ諸国の冷戦後ヨーロッパ秩序への統合の問題や、ウクライナ危機等の現在進行形の諸問題にも言及しつつ、ヨーロッパの複数の機構が重層的に関与しながらヨーロッパの秩序再編成に取り組んだ(取り組もうとした)過程について考察した。

とりわけ研究期間の前半に関しては、コンストラクティヴィズムの分析枠組みをめぐる最近の研究動向の整理や、ヨーロッパ国際政治に対するコンストラクティヴィズムの適用状況とその問題点など、理論的な整理・考察に多くの時間を割いた。他の理論枠組み(国際関係論における批判理論や、ヨーロッパ統合研究における歴史的制度主義、新機能主義、リベラル政府間主義およびその発展形の新政府間主義、いわゆる規範パワー論等)とも比較検討を行い、それぞれの理論枠組みの短所と長所の特定や、複数の理論による相互補完の可能性などについても検討し、複数回の学会報告及び論文(共著に所収)にまとめた。

研究期間の後半においては、当初の研究計画に従って冷戦後のヨーロッパ国際関係における規範の抽出作業を実施するのと並行して、とりわけウクライナ危機(2014~)をめぐる考察を集中的に行った。ウクライナ危機は、西側社会とロシアとの対立という側面のみならず、本研究課題が対象としていたEU、NATO、OSCE、CoEの政策や規範の相互作用という面で、本研究にとって極めて適した研究対象となった。このため、本研究課題に沿って歴史的な検討を進める傍ら、ウクライナ危機の経緯と現状、西側アクターの言説と認識について、危機発生発当初から2015年度末にいたるまで綿密にフォローし、複数回の学会報告および論文にまとめることができた。本研究の性質上、紛争当事者の一部であるロシアおよびウクライナそのものの分析にはあまり詳細に踏み込まず、ヨーロッパの各国国際機構の提示する規範や言説、ヨーロッパおよび米国の政治指導者らの認識と規範、主に西側メディアの報道ぶりなどに焦点を絞って分析を行った。この結果、ヨーロッパの各機構における重要な政治決定をめぐる認識・規範・言説という歴史分析だけではなく、本研究に現代的なインプリケーションも与えることができた。なかでも、ヨーロッパの規範を総合的に検証する共著の執筆に参加し、複数の論文・コラムを掲載することが出来たことは、非常に大きな成果であった。深く感謝申し上げます。

フィールド・ワークに関しては、英国のロンドン・スクール・オブ・エコノミクス図書館を中心とした複数回にわたるヨーロッパでの資料収集を通じ、ヨーロッパ国際関係における規範・言説研究の最前線に触れながら、新たな資料も収集することが出来た。また、ヨーロッパにおける外交政策担当者や対外政策・安全保障の専門家らに対するインタビ

ューも幅広く実施することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

1) Atsuko Higashino, 'Partnership Postponed? Japan-EU cooperation in conflict resolution in East Asia'. *Asia Europe Journal*, vol.14, No. 4. December 2016 (forthcoming). 文字数 7800 語。査読あり。掲載決定、現在印刷中。

2) 東野篤子「ウクライナ危機とEU ミンスクII合意をめぐるEUと加盟諸国の外交」『国際問題』第641号、2015年5月号、27-38ページ。査読なし。

3) 東野篤子「ウクライナ危機をめぐるEUの対応 経済制裁、連合協定、和平調停」(『ロシア・ユーラシアの経済と社会』第987号)、2014年、17-37頁。査読なし。

[学会発表](計 6 件)

1) 東野篤子「国際規範のコンストラクティヴィズム分析 ヨーロッパ統合論の視点から」グローバル・ガバナンス学会第8回研究会部会3、2016年5月15日、早稲田大学(東京都新宿区)、単独。

2) Atsuko Higashino, 'Partnership Postponed? Japan-EU cooperation in conflict resolution in East Asia'. Workshop for Special Issue of *Asia Europe Journal*, 'Integration for Peace: The EU, Regional integration and Conflict Resolution in East Asia', 17 July 2015. Seoul, South Korea, 単独。

3) 東野篤子「ウクライナ危機をめぐるEUの対応、日本EU学会研究大会「EUの連帯」、2014年11月9日、立正大学(東京都品川区)、単独。

4) 東野篤子「ウクライナ危機とEU」、EUSI公開シンポジウム「ウクライナ危機と欧州の将来(1)」(招待講演)、2014年7月15日、慶応義塾大学(東京都港区)、単独。

5) Atsuko Higashino, 'Turkey's EU membership: A perspective from Asia', the Konrad-Adenauer Stiftung Conference, Bridging Asia and Europe - Turkey, the European Union and Asia-Europe relations. 2013年10月28日、Istanbul, Turkey, 単独(シンポジウム招待講演)

6) 東野篤子「ヨーロッパ統合研究における
コンストラクティヴィズム」第60回慶応EU
研究会、慶應義塾大学(東京都港区)、012年
9月29日、単独。

〔図書〕(計 5 件)

1) 東野篤子「コンストラクティヴィズムの
ヨーロッパ統合研究」臼井陽一郎編『EUの規
範政治 グローバル・ヨーロッパの行方』
ナカニシヤ出版、2015年、29-44頁、分担
執筆。

2) 東野篤子「EUは『規範パワー』か？」臼
井陽一郎編『EUの規範政治 グローバル・
ヨーロッパの行方』ナカニシヤ出版、2015年、
45-60頁、分担執筆。

3) 東野篤子「ウクライナ危機は“西側の
責任”か? - 国際社会のEUに対する注目、
期待、理解」臼井陽一郎編『EUの規範政治
グローバル・ヨーロッパの行方』ナカニシヤ
出版、2015年、308-312頁、分担執筆。

4) 東野篤子「対外支援 EUの規範とコン
ディショナリティ」大矢根聡編『構成主
義の国際関係』有斐閣、2013年、101-124
頁、分担執筆。

5) 東野篤子「EUの拡大政策」森井裕一編『ヨ
ロッパの政治経済・入門』有斐閣、2012年、
238-256頁、分担執筆。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東野 篤子 (HIGASHINO Atsuko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60405488